

# 明治 19 年 周防大島 郷の坪災害

【明治 19 (1886) 年 9 月 24 日】

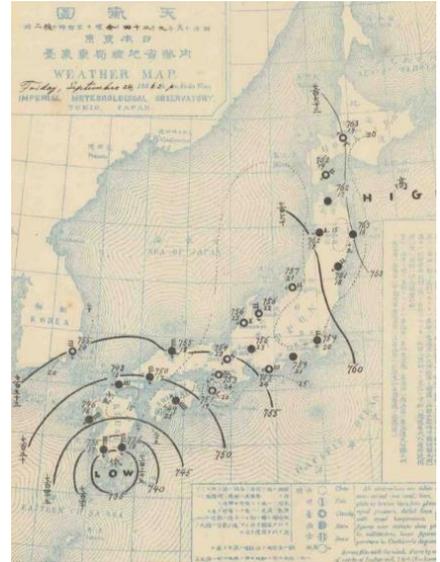
## ■気象の概要

明治 19 年(1886)9 月下旬、一つの台風が九州から中国地方に接近していました。当時の雨量記録が残る観測点は多くはありませんが、この台風により中国地方では風雨が強まり、24 日には下関で 86.5mm、広島で 147.8mm と比較的多くの雨量がありました。広島県では 9 月 10 日に「大暴風雨、呉港で 200 余戸の人家倒壊」、17 日にも「大暴風雨により宇品築港工事の新堤・新道破壊」などの記録があり、相次いで台風が来襲したことをうかがわせます。大きな災害が発生した山口県周防大島町でも、

「9 月 20 日ごろから毎日豪雨が降り続いた。24 日になっても豪雨は止まない」という町誌の記載があり、こうした降雨が災害につながったとみられます。

■22日～24日の雨量 (mm)		
日	下関	広島
9月22日	4.2	0.8
9月23日	24.7	25.3
9月24日	86.5	147.8

(出典：気象庁HP「過去の気象データ」)



9 月 24 日午後 2 時天気図

【出典：気象庁「天気図」】

## ■被害の状況

この台風による被害は、島根県出雲地方で死者 36 人、家屋流失 40 戸、広島県で「暴風洪水により農作物の被害甚大」などと記録に散見できますが、特筆すべきは山口県周防大島町東屋代の郷の坪地区で発生した土砂災害です。

島で最大の河川である屋代川の支流、久保川（別名、鳴滝川）は文殊山から南東に薬研谷と言われる急勾配の谷を下り、郷の坪で屋代川に合流しています。おりからの豪雨のため、まず中腹の櫟ヶ迫くぬぎがさこで山崩れがあり、久保川を堰き止めて天然ダムを形成しました。9 月 24 日午後 5 時頃、この天然ダムが決壊し、大規模な土石流が郷の坪を襲いました。当時の郷の坪は、大工、石工などの職人、木綿商などの手工業者、酒屋などの小売商が多く住み、人家が密集する東屋代の中心的な集落でしたが、一瞬にして泥土と砂礫の荒廃地に化しました。死者 110 人、埋没家屋 62 戸という大惨事となり、1 箇所ですら起きた土石流で



位置図



現在の郷の坪付近の景観 (手前、竹やぶの陰を屋代川が右から左に流れる。「罹災之碑」は久保川と屋代川の合流点付近)

は最大規模の被害とされています。遺体は海まで流れたものもあり、災害後の郷の坪では連日、棺桶を作る槌音が響き、葬式が毎日執り行われたと言います（周防大島町誌 復刻版）。ちなみに、9月28日付の防長新聞は災害の第1報の中で「俄然背面の山腹より山潮が破裂して」と表現しており、これがわが国の新聞報道で最初に土石流現象を報じた事例とされます。

近年の豪雨災害や地震においても、崩落土砂による河道閉塞が発生することがあり、排水や土砂撤去など迅速な対応が重要です。郷の坪の天然ダムは規模としては大きくはありませんでしたが、その決壊による被害は甚大なものでした。こうした事例は、現在にも多くの教訓を残しています。

### 災害の記憶を伝える



郷の坪の「罹災之碑」(山口県周防大島町東屋代郷の坪)

土石流発生の際に、久保川は下流で二つに分かれ屋代川に注いだと言われます。その新たな川の合流点付近に、明治22年、罹災之碑(通称、千人塚)が建立されました。碑文には、被害の概数、災害発生状況とともに、550年前(建立当時)にも土石流災害がありまた繰り返されたこと、山林や地質に関する学問・研究も進んでいるので、予防のための対策を講じる必要があることなどが刻まれています。

正慶二年(一三三三)にも山岳が崩壊した事があった

雷鳴のような轟然たる大音響があり、薬研谷の山が崩れ、水が蕩々と溢れ

轟然者聲如雷藥研谷山崩れ

雷鳴のような轟然たる大音響があり、薬研谷の山が崩れ、水が蕩々と溢れ



西蓮寺の慰霊碑(山口県周防大島町東屋代田中)

西蓮寺には災害時、多くの人が集まり一夜を過ごしました。境内には、当時の大島郡長 田門慶一氏(家族は死亡したが本人は出張中で難を逃れた)が明治20年に建立した「弔百十名之霊」の碑や、郡役所書記永田幸一氏が建立した供養灯籠などがあります。

※碑の写真をクリックすると位置が表示されます

### トピックス

#### ■災害が島の人々のハワイ移民を促した

江戸時代中期以降、人口が増えた大島郡(周防大島)では、伝統的に大工、石工、船乗りなどの出稼ぎが盛んでした。明治10年(1877)の西南戦争後、インフレが激しくなると不況により生活が困窮し、さらに明治16年の干害、17年の高潮、19年の郷の坪災害と相次ぐ災害が拍車をかけました。こうした中、明治18年に政府主導の官約ハワイ移民が始まり、第1回の渡航では全国で944人、その中でも特に大島郡の人は305人を占めていました。明治18年~27年の官約移民の時代を通じては、全国で29,084人、うち山口県で10,424人、大島郡からは3,914人がハワイへ渡っています。後に民間主導の移民時代になっても、先に移住した親戚や知人の影響もあって、多くの大島郡の人々がハワイやアメリカ本土へ渡り、大島は「移民の島」として知られるようになりました。



周防大島町の日本ハワイ移民資料館(内部)